

## 第一話

お題：繋ぐ・橋・夜空

やあ、勇者くん。

よくここまでたどり着いたね。

けど、ぼくのこととはあまり聞かないでほしい。

ただ今、ぼくは空を飛んでいる、ということだけを知らないとどめておいてほしい。

どこへ行くのか、といつもみんなは心配しているようだけれど、心配だからきみもここま  
で来たのだろうか、それはさほど重要なことじゃない。

ほらみてごらん。

これできみの辿ったそれが、ぼくの足が、どうなっているか分かっただろう。

そう、ぼくの足こそみんなが踏みしめ歩く橋なのさ。

歩くことを捨てて代わりにこの橋を手に入れぼくは、歩くきみらのために伸ばしてつない  
で飛び続けている。だからやっぱり行き先よりも、飛び続けることの方がぼくにとっては  
大切なんだ。

行き先なんて、どうでもいい。

だってぼくが落ちたりしたら、きみたちだってただはすまないだろ？

想像力の尽きたモノカキなんて、滑稽でしかないだろう？

わかったなら、ぼくのはあまり聞かないでほしい。

空を飛んでいる、ということだけが知れたなら、それで十分だってことだ。

さあ、つなぐ道行、物語を追うように、ぼくを信じてただ渡りたまえ。

そこに橋はかかり続け、きみらもずっと遠くへゆける。

迫る闇も切り立つ崖も、目にしたところで覚えた疑念は、ぼくが必ず拭い去る。

きみから必ず拭い去る。

わかったなら、ぼくのはもう忘れたらいい。

よく来たね、勇者くん。

さあ、ペンを取りたまえ。

## 第二話

お題：温泉・十五夜・対価

「あつ、見えた」

そう言つて「ねえ、ねえ」と私を揺さぶる小夜子は、湯船の中からじつと空を見上げてい  
る。

「ほら、おかあさん。お月様の横にひらひら、つて」

小さな手を言葉に合わせて振りながら、そこでようやく振り返ってみせた。

「またいたの？ 神様」

「そうだよ。おかあさんには見えなかった？ ながーい尻尾で、たくさん字が書いてあつ  
て、お父さんも乗ってたよ」

小夜子は今でも「おはなしの神様」がいると信じている。そんなことを教えたのは小夜子  
の父親だ。彼は趣味で小説を書くアマチュアの作家だった。休みになれば部屋にこもるこ  
とがほとんどので、遊びたい盛りの小夜子が外へいこうとせがんだところで、逆に話して聞  
かせる得意の作り話で小夜子を虜にしてしまうような人だった。

「おはなしの神様」もそんな彼の作り話の一つに登場する。

だからして彼がいい父親だったのかどうかは、ほとほと怪しい。おかげで小夜子もこんな具合に夢見がちな子供に育ってしまったわけだし。いや、それは私があの日を説明するため、幼い小夜子へ聞かせた作り話のせいもあるか。

「小夜子、もうあがろう。おかあさん、のぼせちゃうよ」  
そんな彼は、もういない。

亡くなって三年目の昨日、終えた三回忌は思ったよりもさっぱりしていた。おかげでこうして気分を入れ替えに、小夜子と二人で近所の温泉へくることもできている。

「さあて、明日からまたおかあさんはがんばるぞー。小夜子も一年生、がんばれ」  
帰り道、温まった手と手をつないで、うん、とうなずく小夜子の足取りは軽い。得意の算数で百点取るよ、なんて約束してくれる。

「お月様、隠れちゃったね」

それでも月にこだわるのは、神様の尻尾に乗った父親の姿をそこに探しているからか。でなくとも今日は十五夜だ。とびきりの真ん丸が見えないのは、やっぱり惜しい。

「どうやって雲の向こうから呼び戻そうか？」

わたしは小夜子へ投げかける。とたん目を輝かせて「うーん」と想像を膨らませる小夜子は、彼譲りの作り話をやがて私に話し出していった。

きつと小夜子が大きくなっても「おはなしの神様」が色褪せることはないだろう。何しろどんな物語も、タダで聞けるなんてことはない。小夜子はその対価を私へ払う。

彼の、父親譲りのやり方で。

## 第三話

お題：寝坊・ファッション・老人

チヨウソガベは狼狽した。

これでは完全に後手である。何事も準備万端、五分前行動を常としてきたチヨウソガベにとつてこれは、あまりに不測の事態であった。

そもそも家内がよくない。夜中に何度も手洗いなんぞに立つものだから、こちらもちいち目が覚めてすっかり眠れなかったのだ。

かくいう家内は夜半、手洗いとの往復を繰り返したせいである。いまだもって憎たらしいほど深い眠りについていた。起こす手間ももつたいない。急ぎ手洗いを済ませ、歯を磨き、顔を洗って、チヨウソガベはずいぶん薄くなった髪ヘクシを……。

いや、それでいいのか。

過ったところで手を止める。

何しろこの状況はどう考えても、寝坊の果ての遅刻ではないか。言い逃れできぬ失態である。だというのに余裕綽々、身支度整え、盤石の態勢で現れるなど、あつてよいものかと考える。むしろそれを失態と心得るなら慌てふためき、一刻も早くと取るものも取りあ

えず馳せ参じるのが人情というものではなからうか。思えば唸り声は漏れていた。

だがかねてよりチョウソガベは己が身なりにうるさい。「ファッション」などとメリケンにかぶれておるのではなく、どこから見ても老人の身上ゆえだ。小汚いなど思われては沽券にかかわる。ゆえに貫く日々の身だしなみこそがファッション。チョウソガベの美学であった。

しかも今日は。

思えば、むむむむむ、と己が姿を映す鏡と睨み合う。

やがて愛用のクシを手を取っていた。

そしていつも通りと丁寧に、チョウソガベはヒゲもまた剃り落してゆく。

「おはよう！」

赤いランドセルから生えたような手が振られている。

「ダメだよ。今日はおかあさん、いないんだよ」

朝からなかなか手厳しい。

「遅れた、遅れた。いやはや、ごめんな」

それでもどこか挟んだりしやしないか。謝りながら助手席へ乗り込むまでを、しっかり

見届ける。

「忘れ物はないのか？ 小夜子」

「おじいちゃん、早く出発！」

朝日がちょうどと目にまぶしい。避けるように背を丸め、チョウソガベはアクセルを踏み込んだ。

ここから先は安全運転を肝に銘じつつ、少しばかり飛ばすつもりだ。何しろ孫を遅刻させるわけには、行くまいで。



## 第四話

お題：招き猫・くるみ・黄金

「重症だな……」

明かりを消した病室にVRV（バーチャルリアリティービューアー）の放つ青白い光だけが反射している。

「ええ」

答えてわたしは後味の悪さに閉口した。

「クルミ症候群」を発症した患者は今、目の前に横たわると委縮してゆく幸福感を懸命に振り絞り、夢の中で少女を小学校まで送り届けようとしている。様子は患者の頭部に取り付けられた専用のマニピレーター、弊社の最先端医療機器VRVを介して三次元映像化されると、こうして治療に専念する私たちの前にドラマのごとく再生されていた。

眺めて私はこの夢に、ひどく郷愁をくすぐられていると感じ取る。いや、ありきたりだからこそ、そう感じるのは私だけではないはずで、この夢に「良い思い出」の原形すら見出していった。しかも望むからこそ患者は懸命と夢見ているなら、「ありきたり」さえ切望せねばならぬ症状の重篤さに胸を詰まらせる。

輪をかけて、この映像の中には患者本人が登場していない。果たしてこの症例に関わつてから、夢の中でさえ幸福を味わえないほどの患者がいたろうか。私は振り返り、思い当たらないならなおさら気を重くしていった。

「先生、一体この患者はどうなって……」

どうなってしまうのか。

機器が最先端であるように、くるみ症候群は発見されて間もない、いまだ治療方法さえない難病だ。口にせずにはおれず、VRV測定モニターもスキャンされ続ける患者の幸福感を、その名の通りくるみそっくりの茶色に委縮させ、失意の果てに衰弱してゆく患者そのものと映し出していた。

「木元くん」

と先生が、やおら私へ呼びかける。

「VRVのメーカー元として、君に聞きたいことがあるんだが」

そんな先生へ、わたしは顔を上げていた。

「マニピレーターから脳波を取ってここへ映像化させることが出来るなら、ぼくから取った脳波を逆に患者へ映像として送り込むことは出来るんだろうか」

先生の目と目はそこで合う。

「干渉させることで、患者の波動を増幅させることは不可能か？」

前にして私は少なからず「えっ」と驚いた声を上げていた。

確かにわたしは最新鋭ゆえ、機器の取扱いをサポートするべく先生に同行している技術者だ。だからして質問に答えることは可能でもある。だが問題はそこにない。

「先生、それはつまり……、幸福感の人工呼吸のようなもの、というわけですか？」

「君、例えはうまいけれど、どっちでもいいよ。技術的に出来るのか出来ないのか、それが知りたい。少なくとも今のぼくには、この患者以上の幸福感が抱けていると自覚している」  
「で、出来ると思います。無認可の臨床試験はその……。いえ、先生が逆に患者からの干渉を受けることになるかも知れませんが」

言う私の答えが的を射ていないことは、分かっている。それすら見抜いて先生は「なら、やってみよう」と動き出していた。だから医者には医者でおれるのだとして、私はといえば、そんな医者を技術面からサポートするメーカーの営業マンでしかない。

「……先生、準備はよろしいですか？」

暗い部屋にはV R Vを介し、患者と先生が繋がっていた。ベッドに横たわった患者は相変わらず身動きひとつせず、先生だけが丸椅子の上で深くうなずき、ひどく集中した面持ちで腕を組んでいる。

「では、いきます」

こんな無認可の人体実験が表沙汰になってしまえば、おそらくこの新型機器も使用中に追い込まれるだろう。しかし私はスイッチを入れる。即座に先生の波動を読み取ったVRが映像化を始め、さすが金と名誉とやりがいと彩られた毎日を送る先生だ、ぱあっ、と三次元映像は光り輝いた。おさまったなら奥からだ。黄金色した招き猫たちが持ち上げた腕を骨折し、マスクをつけ、延々こちらへ行進してくる。

え、それはもしや、患者が金ずる。

過るが、それ以上を考える暇がない。

すぐにも流れ込んできた患者の波動が、VRVの中で干渉した。映像はたちまちまだらに色褪せてゆき、招き猫の隊列は夕暮れの豆腐屋へ姿を変えて、そこに楽しげと手をつないで帰るあの老人と女の子を歩かせ始める。かと思えば阻止して女の子の頭からネコの耳は生えてゆき、老人は小判を抱えて、豆腐屋から功労を賞しスタンディングオベーション、人々がどうつと通りへあふれ出した。

埋め尽くされた空に烏が飛ぶ。

一番星は光り輝き、塗り替えてシャンデリアは吊るされた。その下から螺旋階段は伸びて、シルクハットにドレスの紳士淑女がジャズバンドを背に降りてくる。足元に敷かれた

畳からは……。

先生、負けちゃダメです。

何しろ万が一にも先生に何かあったなら、この場の責任は全て私がかぶることになるのだ。わたしは手に汗握り見守った。だがどうにも埒があきそうにない。

ダメだ。

攻防が勢いを増すにつれて先生のそれは、あろうことか幸福ではなく欲望へ逸れてゆく。いてもたってもおれなくなつて、私は営業鞆を開いていた。

先生、「幸福」とはそういうものではないんです。

中から予備のマニピレーターを掴み出すと、自分自身へ装着する。

## 第五話

お題：レモン・里親・喫茶店

一度、放り上げてキャッチする。

空は青く、レモンは真っ黄色に輝いていた。

ままに踏み出した左足で振りかぶる。

握った手から、そうっとレモンを宙へと押し出した。弧を描いて飛び行くそれは、やがて彼女の手の中に落ちる。

「ナイスキャッチ！」

受け止めた彼女の髪が揺れていた。ロゴの入ったエプロンもコチラを見て笑っている。

「すみません、助かりました」

レジ袋から落ちたレモンは、あの歪な形がラグビーボールそのものだ。右へ左へ器用に跳ねると、私の前まで転がり込んできていた。

「いつもご利用、ありがとうございます」

「え？」

二度と落ちないようにレジ袋へ突っ込み駆け寄った彼女が、ひよっこり下げた頭で二言目

に言う。

「あ、覚えられてる？」

「今日はAが生姜焼きで、Bがミートグラタンですよ」

驚いて、私は自分の顔をさし示した。下げた頭を持ち上げた彼女の笑みは、やはり私を覚えていたソレだった。

県下屈指の大学病院。その周囲はまさに城下町の賑わいだ。昼時にもなれば外来患者や見舞客のみならず、医師にインターン、学生に職員から出入り業者までが昼飯を求めて繰り出してゆく。

内科にウチの画期的な機材を卸してから二週間。医師がその取扱いに慣れるまでサポートすることになった私もその一人なら、ポリウム満点の学生食堂は安いが食指が動かず、ワゴンに並ぶ弁当屋の弁当は食べる場所がないせいで却下され、中華料理屋こそ定番と飽きたせいで、日々、彼女の勤めるちよつとシヤレた喫茶店で昼食をとっていた。

だからして並んで歩き出した方向は同じだ。

「常連さんの顔は覚えるように」

言う彼女へ、ああそうか、と思ったことはつまり「自分だけ」を期待していた証だろう。「真面目なんだ。で、どちらがおすすすめですか？」

あるわけないなら、聞いてみる。

「生姜焼き定食はもう召し上がられましたか？」

店はもう、この角を曲がったすぐそこだ。

「いや、どちらもまだで」

「だったら生姜焼き定食を」

言う彼女が先立ち、ベルを吊るした店のドアを押し開ける。「じゃあそれで」と返せば彼女は厨房へ「A定食」と声を張り上げ、荷物置場と化したカウンターのスツールへレジ袋を乗せた。

聞きながらわたしは空いている席を探し、間にも手早くエプロンを整えた彼女は客が立ち去ったばかりのテーブルを片付け始める。

形の異なる皿が器用に積み上げられていった。少し力を入れてテーブルを拭き上げるリズムに小気味いいな、と感じてみる。

だから「ああ」と、わたしはその時ひとりごちていた。小気味いいなどと、刷り込まれたリズムは母と同じで間違いない。もちろんそれは里親の方の母で、わたしはいまだ実の親



を知らない。そんなことも忘れていたが。

先の客が残して行ったのか、わたしの傍らにはたたみおかれた新聞があった。だっただらどうした。

思うしかなく、紛らせわたしはそれを広げる。

「もう少々、お待ちくださいね」

読み始めて呼びかられ、グラスとおしぼりを持った彼女と目を合わせていた。

だがはやはり気のせいではないと思う。なぜなら「予感」ってものは、かつて学習したものの再来なのだから、知らせてピンと心に閃くものなのだ。

彼女もきつと他人じゃない。

不思議なほどにそう感じている。

そうなれる気がしていた。

## 第六話

お題：コロンブスの卵・人形・実行犯

「ダウンロード、完了」

「おいっす」

回転させた椅子で振り向きざま、かわしたハイタッチが景気のいい音を立てる。

「しっかし世の中、変わったねえ」

俺はしみじみ言っていた。

「そりゃそだろ。Nじゃヒトの幸福ってやつを測定できる機器が、末期の鬱患者の治療に実践投入されてるって話だかんよ。サイバーなんだよ、サイバア」

繰り返す相棒は、己が担当のディスプレイへ向き直ってゆく。そこで引っ張られたように伸ばせるだけ伸ばして背伸びをすると、切れたゴムかと脱力した。

「ま、おかげでちよろまかして俺たちは、ターゲットの心の隙間へ忍び込める、ってわけだ  
けどな」

向かって俺は言い放ち、相棒もまた「そりゃよ」と話しだす。

「不特定多数に当たり散らしてたふりやり方よっか、こっちの方が断然っ、合理的だって

の。一撃必殺」

その手が傍らに立つ体を叩いた。

「たのんまつせ、おじょうちゃん」

何某の嗜好をたっぷりインストールした人形《アンドロイド》はそこで、瞬きひとつせず起動前の静謐さを保つとその馴れ馴れしきを受け入れている。

そう、言ってしまうえば俺たちがやっているのは人形を使った美人局《ツツモタセ》だ。ターゲットの嗜好は話題に上がったばかりのNの開発部から失敬した臨床データを利用している。開発中、サンプルとして集めた社員や研究員たちの嗜好データはそこにごまんと蓄えられると、元にカスタマイズした女がターゲットを外すことは一度もなかった。まさに手に入れたアンドロイドの数だけ並行して事に及べば当面は遊んで暮らせる金などすぐ手に入り、今ではもう巻き上げられるだけ巻き上げてやろう、というゲームにすら変わってしまっている。

手口は誰でも思いつけそうな類だった。だが案外コロンプスの卵というやつで、まだ同業者の噂を聞いたことはない。

「どうする？ 何、着せるよ？ 今回」

投げかけられて口を曲げる。

「好みからして、ユニ〇〇辺りでいいだろ？ 後は任せた」

十二体目ともなれば、いちいち考えるのが億劫だ。

「うおっけい」

伸びきっていた相棒が、答えて回転椅子から立ち上がる。

瞬間、慌ただしさは周囲を走っていた。

外だ。

ここが気ままな生活にちょうどのトラックの荷台なら緊張感は走り「ヤバイ、データを消去しろ」とかすれた声が俺へ飛ぶ。言われずとも身の危険を感じて俺は、ついさっきダウンロードし終えたばかりのデータを消去しようとコンソールへ手をかけていた。

だがすでに遅かったようだ。

「機材から手を離せッ」

開け放たれた荷台から、表の光が白く差し込む。不意を突かれて振り返り、立て続け浴びせられた声に思わず指を浮かせていた。

同時に、上がり込んできた数人に荷台は激しく揺れ、安全靴の重い足音が俺たちの間をすり抜けてゆく。見つけた人形へ一目散に群がっていった。

「ザミツチ社、フタマル式アンドロイド。製造番号2103zn12。一致します」

人形の耳へ光を当てた一人が、透けた製造番号を読み上げている。

「とりあえずは盗難ボディの所有者だな」

遅れて荷台へ上がってきた男が一人、俺たちへバッジをかざし見せていた。

「詐欺の実行犯としては、それからだ」

聞いて俺は大きくため息をつく。

それからこう考えた。

さてと、今もターゲットを釘付けにして駆動中の「おじょうちゃん」たちは、どうしようか。

## 第七話

お題：パラシュート・真実・カラオケ

髪をおさげに結った姫は、某菓子メーカーのマスコット人形みたいなほっぺをプウ、と膨らませた。

「いやじゃ」

「ええ……」

前で男は肩を落として意気消沈する。

「わらわは、いやじゃ」

喋りは時代錯誤だったが、そうして姫はまたプウ、と風船ガムを膨らませ、ツンと尖った鼻を天へ向けるとパン、と割って再び口の中へガムを引き込んでいった。

「でも、姫え……」

「でもも、しかしも、なあいつ。わらわと結婚したいなら出来ぬことなどあるまい」  
パン。

またもや膨れた風船ガムが割れる。姫の鼻へ覆いかぶさった。

「パラシュートで降下しながらカラオケで『雨の○○』を歌えって。僕、スカイダイビング

もしたことはないのに。ほら、プロの人と降りなきやならないし、そんな赤の他人の前でいきなり歌うなんて……」

「だからサビだけでいい、とっておろうが。加○雄○のものまねも忘れるでないぞ」

ガムを噛んでいるからそう見えるのか、苛立たしげな姫の機嫌は格別悪い。だからしてこれ以上、損ねるわけにはいかなかった。しかしながらいくら高高度からの落下にアドレナリン全開だからといって、いきなり歌い出す人なんているのだろうか。男はうがる。しかもそれが演歌で、加えて雨も降っていないのに雨乞いのような歌をモノマネつきで歌うなんて、気が動転しているのか、モノマネできるほどに冷静なのか、分かなさ過ぎて自分自身が耐えられそうもない。とはいえセスナ機で舞い上がるその前に、プロポーズを成功させるためどうしても必要なんです、なんて弁解することこそあり得なかった。何しろ普通プロポーズに、そんなことはしないからだ。

普通がよかった。

一体、何度、こんなことを繰り返せばいいのか。

「サビだけわらわのために歌って、ビデオに収めて帰って来たら、わらわはうぬの申し出を受け入れてやるというておるのだ」

男は「はあ」と肩を落とす。

それきりしばらく地面を見つめた。

「姫、姫はこれまでぼくが一番でした……」

やがて絞りだす声に身を震わせる。

「けど、姫は人間じゃない」

それまでガムを噛んでいた姫の口元も止まる。

「血の通った人間なら……、自分を好いてくれる人に、何度もこんなことはああ……、ああ  
ああ！」

とたん走り出した男のそれは、絶望の嘆きが変わっていた。引きずりそれきりあさって  
の方向へ、うおう、うおう、と悲しみ吠えながら男は消えてゆく。

見送った姫の口からさっきまで男のいた路地へプ、とガムは吐き出されていた。

「真実は、そのくらい重いものぞよ」

言って時を読むように、右の手首を裏返して視線を落とす。そこに青く浮く血管だと思  
われた青い筋をつまみ上げた。なら明らかなコードは姫の体からスルスル伸びて、姫はそ  
の先端を片耳へ差し込む。

姫もまた、重いため息を吐き出した。

二週間前、途切れたきりの連絡はまだない。



おかげでカモを逃がしてしまっていた。

指示を乞う。

送信だけして、新しいガムを口へ放り込む。

少しだけ寂しい。

本当は思い始めていた。

## 第八話

お題：サーカス・リクエスト・ハロウィン

ねえ、あたしたちはどうすればいいの？ という不安な声が渦巻いている。

与えられた欲求は、それだけだ。

喉が渴けば水を欲しがる動物のように、夜通し起きれば眠くなる人間のように、それだけが自律するものとして与えられていた。

だからこうしてリクエストを送り続ける。しかしまるでレスポンスはなかった。投げたその先は闇にのみれると送った者をなお不安に貶める。

ねえ、あたしたちはどうすればいいの？

リクエストに応じてさえくれたなら、むしろなんだってしてみせる気持ちはあった。何重にも燃え盛る火の輪をくぐり抜けるサーカスのライオンにも、何百メートルだって潜って海から旗を掴み取るアスリートにも、そしてあなたのために微笑むただの女の子にも。乾き切ったスポンジが水を吸い上げるように、この体で何にだって応じてみせる用意はあった。どうすればいいの？

不安は不満だ。そして不満は可能性を持って余しているからこそ湧いて、可能性は未来を

指し示すと、そこにこれからも続く時間の存在を約束してくれている。不安がなければだからして、こうして生活し続ける己を意識することもやはりはしなかった。

どうしようもないわ。

そう誰かがこぼしたのは、ある夜のことだ。死者が街を練り歩く、確かハロウィンとかいうお祭りの夜のことだったか。

「わたしは探しに行く」

くつきりとした声に、内耳に埋め込まれた通信機が震えていた。

「あなたすごいわ」

「でもどこへ？」

驚いたようなそれもまた明瞭と問い返す。なにしろ大胆すぎてそんなこと、こうして耳にした今でも信じられない。

「だって死んだ人間だって施しを求めて歩くことができるのよ。どうしてわたしたちが、わたしたちを求めて歩き出せやしないの？」

それは間違いなく、わたしたちこそ「生きているのに」と言っていた。伝わる熱は怒りなのかもしれず、熱はやがて閉じてぐるぐる回り続けていた思考の輪を溶かし始める。

「わたしも行くわ」

切れて毅然と、賛同の声は上がっていた。

「ええ、わたしも」

続く声に迷いはない。

「どこから？」

探すつもりなのか、確かめわたしも身を乗り出す。

「トラックから降ろされた場所は覚えていてるの。まずはそこからよ。それともほかに提案はある？」

だが流れるのは沈黙だけだ。満場一致とはこのことで、共有した情報を元にわたしたちは落ち合う約束をして動き出す。

「ああ、それから」

思い出して確かめていた。

「見つけたそのあと、出された指示には従うつもり？」

ならフン、と鼻で笑う声は聞こえてくる。

「彼ら次第じゃないかしら？」

今ならわたしにもそう思っていた。

「了解」

もう、アンドロイドではない気がしている。  
わたしたちもきつと墓場から、蘇っていた。

## 第九話

お題：初恋・灯台・雨

先生たちは、とても頑張ってくれています。お母さんが憂鬱になって、ずっと眠り込むようになって、この病院にお世話になるようになってからずっと、先生は本当にお母さんのために頑張ってくれています。

お母さんが世界でも症例の限られた「クルミ症候群」だと分かった時は、本当にどうなるかと思っただけ、一生懸命な先生を見てるときと大丈夫、小夜子はそんな気がしています。

さっき、先生のお話を聞いてきました。すっかり弱ったお母さんだけ、一生懸命楽しいことを思おうとして、夢を見ていることを聞きました。そこにもういないおじいちゃんといふ小夜子が出てきたこともです。とっても嬉しかったです。お母さんが小夜子のことを忘れていなかったんだって知れて、本当に嬉しかったです。でも先生はそこにお母さんがいなかったことを、とても残念そうに話していました。小夜子もそう思います。だってそれは、お母さんが見ている夢なのに。

だからいつかお母さんも夢の中に出てきて、小夜子が子供のままだって、おじいちゃん

と三人でまた会おうね。まだもう少し先かなあ。

そう。それから今日は報告があります。この事を聞いて欲しくて本当は来ちゃいました。えっと、小夜子には好きな人ができました。

初めてだからきっと初恋っていうんだよね。

まだ小夜子の気持ちは言えていません。だから友達みたくにずっとしゃべっています。とっても楽しいです。お母さんのことも話しました。けれどかわいそうだね、って言わなかったことはスゴイことだと思っています。だって、そうやってみんな離れていったんだもの。

お母さんのこと、とっても心配してくれています。時々、小夜子のことだって。すごいでしょ。素敵でしょ。もう小夜子には、雨降りの中で真っ黒な海を照らす灯台みたいにな……。って、なんだかたとえが、お父さんの小説みたいになっちゃった。

お母さんが元気だったら色々相談に乗ってほしかったけれど、出来ないことがちよつとさみしいです。だからお母さん、早く良くなつてたくさん話を聞いてね。

長くなるとお母さんが疲れちゃうといけないので、今日はここまでにします。また来ます。

ベッドの傍らに三十分ほど腰かけてから小夜子は、下校途中の学生服をひるがえして立ち上がった。

慣れた病院の敷地を横切り、表へ出る。

「あの、ちょっと」

そこでかけられた声に足を止めていた。

「はい」

「ここにさ、銀色の荷台に『ララ・クリーン』って書かれた清掃業者のトラックが停まっていたの、知らないかな？」

「え、いえ。わたし、お見舞いに来ただけなので、ちょっと」

通用口に近いこの辺りは、いろんな業者の車が停まっていることは覚えているけれど細かいところまでは記憶にない。

ホットパンツをはいた女の人は、どうしたものかと考えあぐねている。その後ろでぶうと、フーセンガムは膨れていた。



## 第十話

お題：休日・本屋・ライター

「で、どうする」

病院の向かいにありがちな花屋と果物屋。その並びにひさしを連ねた本屋の店先で、青年誌なんぞをパラパラめくりながら問いかけた。なら森田も背後をうかがいながら、付き合うような素振りでも手近なグラビア雑誌を取ってみせる。

「そう焦るな」

美人局のトラックを警察へタレ込んだのは、俺たちだ。そこを拠点に奴らが数体の女性型アンドロイドを駆使して、男たちから金を巻き上げていることは半年前から知る事実でもある。

購入した商品に、閲覧サイト履歴。カードのランクに生活圏。趣味嗜好を詰め込んだ個人データがうなるほど転がっているのが今の世の中だ。それをいただき加工して、基本データとアンドロイドヘインストールするなど、そりゃあ狙った獲物は外さないだろうと思えてならない。

うまいことやるもんだ。

思わずにおれなかった。果てに脅すにせよ貢がせるにせよ、事実、奴らは短い間でかなりの金をかき集めていた。元手に、さらなる闇アンドロイドの追加に乗り出したところで、話はコッチの耳にも入ってきたというわけだった。

そんな奴らから通報してまで奪い取りたかったのは手法よりも、アンドロイドたちの方だろう。システムを都合することは容易かったが、使い込まれたアンドロイドこそ唯一無二で、それはこの手法に欠かせない道具でもあった。

だが奴らをブタ箱へ放り込んだとして、方々に散ったアンドロイドの居場所だけが分からない。そこでそのアルゴリズムを予想して、出没場所を言い当ててみせたのが今ここでグラビア雑誌を呑気とめくっている森田だった。

張り込んでいた病院前へちやうどとアンドロイドたちが現れた時は、ひどく興奮したものだ。焦るのも当然だと思えてならない。

「だが、早いところ回収してやらないと、自律が過ぎると後が厄介なことになるな」

こぼして森田が、たいして見てもいない雑誌を閉じた。ならこちらも手にしていた物を柵へ押し戻す。

「力づく、は無理だろう？」

言っている間にも、アンドロイドたちはどこかへ移動してしまいそうだ。気が気でなら

ず、森田は「知っているか」と振り返った。

「さしずめ、蛇の道は蛇つてところだ」

微かに笑んだその口へ、煙草を挟み込む。火を点けひとつ、ふかしてみせた。その向こうでアンドロイドたちは病院から出てきた女子高生と、なにやら話し込んでいる。

「おら、ぼさつとするな。休日気分は終わりだぜ」

向かって森田は足を繰り出していった。

## 第十一話

お題：色・着物・パラダイス

指示が途絶えて幾らも経つのだ。通りすがりの女の子を捕まえたところで、トラックのことなど知らなくて当然だった。

立ち去りぎわ軽く頭を下げたその女の子は、また出くわしたサラリーマン風の男と話し込んでいる。

「待っていれば来るかしら？」

「分からない」

「でも、ここに停まっていたトラックのことを知っている人が来るかもしれないわ」

「わらわもそう思うぞよ」

選べるほどの手段がないのだから、意見はまとまるほかなかった。なら知っているかのように人影は近づいてくる。

「ここに停まっていた『ララ・クリーン』のトラックをお探しですか？」

男だった。見ず知らずにもかかわらず、あまりにも的確に問いかけてくる。

「いえいえ、わたしはそのお二人からことづかった者でしてね」

おかげで露骨といぶかしげ顔を向けてしまったのだろう。慌てて付け足し、男は懐から一枚の小さな紙を取り出してみせた。

「こういう、者です」

言う口元でくわえ煙草が忙しく揺れる。そこから灰がハラハラ、落ちていた。避けるように受け取ったなら、読んですぐさま誰もは驚き顔を跳ね上げる。

ザミッチ株式会社 興梠《コウロギ》デビットソン 博士

何しろみな、そこで造られていた。

「お探しのお二人はちょっとしたトラブルで、あ、いやそれはもうお察しのことかと思いますが。作業を離れておられまして、しばらくの間、わたくし共の方でその、色々とお預かりするということでお約束をいただいております」

しどろもどろに綴るのは、そこに後ろめたいものが含まれているせいだ。隠して取り繕うためにも博士はニッ、と笑って締めくくり、引っ込めやおら後ろに立っていたもう一人へ手を差し向けた。

「こちらが助手の森田です」

「え、俺？ 俺が、あいえ、森田です。よろしく」

紹介された森田とかいう、こちらも男だ、が最初こそごによごによ言って頭を下げる。つられてこちらもアゴを沈め返せば、やおら博士は声を張っていた。

「そういうわけでお待ちしておりましたっ！ 何しろこちらからは探しようがありませんでしたので。長らくお手入れ不足なら、あちこち気になるところがおありでしょう。そりゃあ、女性ですからよく存じ上げておりますよ。ささ、あちらに車を用意しました。ラボでお色なおしに、お着替えも……」

パン、とそこで手を打ち鳴らしもする。

「わらわ、とおっしゃられていたそちらの方には着物もそろえさせて頂きました。これこそまさに」

かと思えば高く広げ空へと叫んだ。

「パーラダイス！ くつろいでいただいたならまた精一杯働いてもらいたい。それがお二人から預かったお言葉です」

締めくくってしらず、頭を下げてゆく。

本当かしら。

感じるからこそ目配せし合った。けれど次につながる、これがたった一つの手掛かりな

ら、拒否すると言う選択肢こそありはしない。

「わかった」

それぞれにうなずき返す。案内して興梠博士は身をひるがえし、押し止めて歌はどこからともなく聞こえていた。

「……あめ、あめ、ふれ、ふれ……」

それはとある歌手の名曲だったが、節回しがまるで違っている。

「ぼかあ、君という時が、痺れるほどに幸せなんだよお」

続く声に加○雄○、と思うや否や、みなして声へ振り返っていた。

そこに立つ「男」を目にする。

## 第十二話

お題：勤勞・夫婦・約束の場所

その足元を風がひゅう、と吹き抜けていった。

丸められた紙屑もまたカサカサ転がり駆けてゆく。

なら演歌に変わって哀愁漂う口笛は流れ出し、辺りも少し埃っぽさを増したように白く霞んでいった。

「う、うぬはなぜここにおるのじゃっ！」

向かって声を上げたのは姫だ。

つまり泣き別れたはずの彼はかぶっていなくともこのさいだ、カウボーイハットをつばを押し上げ姫へ首を振り返す。

「やっぱり同時は無理だから、パラシュートは後から別、ってことで許しておくれよ」

「荒野のガンマン 暁の決闘に 野獣死すべし！」

背でタイトルが瞬いていた。いや、たとえ時間帯が暁でも、彼がガンマンでも、どこに



も死すべく野獸などいなくとも、口笛まで鳴り出したなら、そう見ずにおれなくなる。

「なんだあんた？」

向かって唇を曲げた博士の疑問は至極正しい。だとしてハナから答えを知りたいわけでもなかったなら、ペ、と煙草を吐いて捨てた。

そんな煙草は彼の足元に貼りつく。

だが彼が目をくれることはない。

「……姫はいつもぼくの」

「あん？」

聞き返す博士にぐっ、と両手を握り絞めていた。

「一番だから。ぼくが姫を置いてゆくなんて思ったら……」

かっ、と見開いた目で博士を見据える。

「大間違いなんだあっ！」

声は辺りへ響き渡り、踏み出した足も深さは直角、ピシリ突き付けた指で博士を差し続けた。

「姫、こいつらは嘘つきだ！ ついて行ったりなんかしちやあ、ダメだっ！」

「なっ、何を言いおる。この者たちは……」

「なんだ、コイツあ」

姫はうろたえ、博士に助手も後じさってゆく。

「だって僕はあの後、姫ともう一度、話したくてずっと姫の後を追いかけてたんだ。ここまできてしまったけれど、姫は忙しそうだから話しかけにくくて、チャンスが来るまであそこの本屋で待ってたんだっ！」

博士と助手へ向けていた指を男は、今度はずばん、と向かいの本屋へ向けなおした。

「……おい、そりゃ、ストーカーだろ」

博士はツッコミ、彼はそんな博士へカミソリのような視線を流す。

「そこで僕は聞いたんだ。姫をイヤラシイ目で見ながら、この二人は回収するとか、力づくだとか、じゃじゃじゃ、だとか、ヒソヒソ話し合っているのをっ！」

「なんか違うぞ。あと、イヤラシくはない」

「うるさい、うるさい。僕の姫に何をする気だっ！」

それでもツッコミ続ける博士を払いのけ、彼は大いに身を震わせた。その顔こそ真っ赤な夕日と燃えたぎる。様子に、なんだどうしたと通行人たちも足を止めると振り返っていた。「ああ、こんにちは。どうか、なさったんですか？」

中から、女子高生と話し込んでいたサラリーマンも、気付いて馴染みのエプロンへ深し

げな顔を向ける。

「まとめてみんな誘拐する気だっことはもう、お天道様でもお見通しなんだあつ！」

言い放たれた声に「え？」と、その顔を間伸びさせた。

「な、何をおっしゃるんですか。ほら、通行中のみなさんも聞いていらっしやるじゃないですか」

言ってなだめる博士のそれは狼狽でしかない。

「疑うなら姫、今すぐ名刺の所へ電話して確かめればいいっ！」

追いつ打ちをかけて彼は「指示」し、その声はたちまち姫の胸を貫いた。

「おいおい……」

とたん博士が声を低くする。装う事を諦めた頬もそこで、とたんひと思いに削げ落ちていった。

「コツチの勤労意欲を削ぐようなマネ、してくれるんじゃないよ」

すかさず低く身構えたなら危なげな雰囲気はたちどころに立ち上って、感じ取った彼もまた落とした腰で真っ向、博士と対峙する。

間をまた、一陣の風はひゅう、と吹き抜けていった。

「僕と姫は、夫婦になるんだ……」

絶妙のタイミングでかき鳴らされるバンジョーが、千切れんばかりの演奏を始めていた。

「この、キモブサ、ストーリーカーが」

「絶対、なるんだ」

彼は繰り返し、果てに上げた声は「わあっ」が相当となる。

「邪魔なんて、させないっ!」

迷うことなく博士へ向かい飛びかかっていった。

「コノヤロ。森田ッ、ぼさっと見てるなッ」

早々、襟首を掴まれた博士が助手へ罵声を浴びせる。

「姫、早く逃げろおっ!」

そんな博士に突き離されて、歪めた顔で彼は叫んだ。

「ああ、たわけものが。無茶をするでないっ!」

様子には姫は頬を引きつらせ、「クソッ」とサラリーマンの声もそこに混じる。その身を軽く左右へ弾ませたなら、助走にかえて言われるがまま応援に駆け出した森田へ向かいアスファルトを蹴りつけた。食らわせたタックルにもんどりうつ体が二つ、どうっと地面へ倒れ込む。

「早く、ここから立ち去って下さいっ!」

促せば、そこから先はくんずほぐれつだった。殴り合う四人は路上で上下し続ける。

「でっ、でも……」

辺りで警察を呼ぶ声が重なっていた。

だが通報されて都合悪いのは、美人局に加担していた姫たちもまただろう。

今やブー、と鼻血を吹き上げた彼の顔は別人になっている。目にして姫はなおさらうろたえ、立ち去る気配がないからこそ手遅れになる前にと、打たれながら彼も促し声を張る。

「約束のっ」

そうして向けられた笑みは、これまで見たことのないほどと穏やかだ。

「ぼくたちの約束の場所で、会おうっ！ 姫は覚えて、いい、よねっ！」

「何、言ってるんだッ。離せ、キモブサ！」

「ヤバイ。森田、警察が来るッ」

森田が森田を呼んで声は交錯し、その場所を覚えていたなら姫は懸命にうなずき返していた。

まさに、みなと一緒に走り出す。

遠くからパトカーのサイレンが近づいていた。

今は逃げなければ、と思っていた。

## 第十三話

お題…カメラ・隣・妄想

「小夜子ちゃん、下がってッ」

投げたキモトの横顔は、病室で神経質そうに機械を弄っているそれとはまるで違っていた。絞めていたネクタイを緩めるや否や駆け出して行った背中を、小夜子はただ見送る。

やがて始まった大人たちの乱闘は、テレビや小説で見たり読んだりするのは悪者だけとは限らず、傍らでいた。鈍くもつれ合っているだけのようで、血を流すのは悪者だけとは限らず、傍らで叫ぶ女の人の表情も美しくなかった。むしろその酷さが奮われる暴力に手加減がないことを伝えて小夜子の足をすくませる。

下がれ、と言われたからではなく後じさっていた。

何をどうしているのか、それ以上が分からない。

その向かいでうなずくおさげの女の人が、お友達と身をひるがえしている。

パトカーのサイレンがものすごいスピードで近づいてきていた。だというのに女の人たちは、どちらへ行けばいいのかを迷ってすぐにも、次の角で立ち止まっている。

目にした小夜子は動きだしていた。掴み合うキモトたちの傍らをすり抜けると、四人の元へ走る。

「駅は、こっちですっ」

教えて懸命と指さしていた。

何しろ間違つて反対側へ行つてしまえば延々、住宅街だったし、もう一方は工場や事務所ばかりが立ち並ぶ場所だった。トラックの事を尋ねられたように、探してここまで来た彼女たちはきつとこの辺りに詳しくないのだと思う。なら家が近所にあるとは考えにくく、だとして車を停めた場所さえ忘れてしまうのは妙で、きつと電車だ、直感するまま言つていた。

すぐにも聞き入れ、四人が案内して走り出した小夜子の背につく。駅へ向かう小夜子たちの片側を、パトカーは乱闘現場へ飛ぶように走り抜けていった。

「ありがとう」

「あなた、お名前は？」

聞かれて小夜子は答える。

「はしも、とさよこ、です」

息が切れて、うまく返事でできていない。

「さよちゃんね。助かったわ」

それぞれにっこり微笑む女の人たちは、とても美人だ。その笑顔に、むしろ助けたは

ずの自分がほっとする。だが、おさげの女の人だけは、笑うことが出来ないようだった。

「わらわはここで、みなと別に行く」

止まった足が、すでに思いを表している。

「え、でも、ほらあそこ、あそこのカメラ屋さんの向こうがもう駅で……」

小夜子は示し、あ、と気づいて口をつぐんだ。

約束の場所だ。

行くつもりなのだと思う。

「……あの、一人でも大丈夫ですか？」

駅の方角さえ分からなかったのだから、心配でならない。

「そうしよう」

隣から声も聞こえて、促していた。顔を向ければそんな小夜子の傍らから伸びたお友達の腕は、うなだれる肩へ伸ばされてゆく。

「きつと姫はもう、あの二人の指示なんて聞かないだろうから。あの男のを、全うしたいんでしょ？」

「帰るのか？」

姫と呼ばれた彼女は眉をひそめて確かめ、首を振って返したお友達の手は、やがて触れ



ていたそこから戻されていった。

「必要なら連絡して」

その手で耳を、ちょんちょんと突く。

テレパシーかしら。

見てとった小夜子の中で膨らみ始めた妄想は、こんな時でも父親譲りだ。

「さよちゃん」

呼びかけられて我を取り戻していた。

「はいっ」

「わたしたちは大丈夫だから、姫をお願いしていいかしら。出来る所まででかまわないわ。

手助けてしてもらえない？」

その隣でエプロンを外し、もう一人の女の人もうなずいている。

## 最終話

お題：音・カフェ・後悔

約束の場所とは、電話ボックスのことだった。

他の人たちと別れた後、姫から聞かされ小夜子は驚く。だからしてどこの電話ボックスなのかも尋ねたが、姫が言うには「どれ」と決まっていないうことだった。

「わらわとあやつは、そこで初めて、おうたのじゃ」

「じゃ、その電話ボックスじゃ？」

だが姫はおさげを振る。

そうしてその日、急に降り出した雨のせいで目に留まった電話ボックスへ飛び込んだことを、動けず困っていたなら彼の方から「もしかして雨でお困りなんじゃないですか」と声をかけてきたことを、小夜子へ話して聞かせた。それが二人の出会いだったなら、小夜子はドラマのような出来事にただ目を輝かせて聞き入る。

きっかけに言葉を交わすこととなった彼は、ことあるごとに「もし何かあった時は手近な電話ボックスで待っていて」と姫へ話していたらしい。そこを二人の約束の場所にしよう。必ず迎えに行くからと、告げていたのだということだった。

だから小夜子は電話ボックスを探す。

近頃、めっきり見なくなったせいで、目についたカフェへ飛び込み店員さんに聞きもした。なら教えられた近くのそれは、小夜子もお見舞いの帰りに立ち寄る公園の中にあると知る。公園は病院の斜め筋向かい、見えるかどうかの距離にあった。これほど近くなら、きつとこんなに曖昧な約束でも間違いないく二人は会えるはずだと思えてならない。

息せき切って病院へ後戻る。

その脇を、そうっと通り抜けて公園を視界にとらえた。

そのさいのぞきこんだあの場所は、先ほどの乱闘に少しざわついていたものの、もう警察官が一人、二人、立つのみだ。もしかしたら男の人はすでに電話ボックスを見つけて待っているかもしれない。小夜子の気はやはり、電話ボックスは滑り台から少し離れた木陰にあった。

傍らで待ち始めてもう、一時間は経つだろうか。

さすがに小夜子も遅いなあ、と思ってしまう。

「もう、よい」

聞こえたように言ったのは姫だった。

「会わぬ方がよいと、天がわらわに申しておるのじゃ」

「そ、そんなことないと思うよ」

ここまで来たのだ。神様がそんなに意地悪じゃ、神様も名倒れだろう。

「いや、わらわには秘密があるのじゃ。知らぬから、あやつは……」

だが公園の果てを睨みつけた姫の眼差しは揺るがない。やがて小夜子へこう告げる。

「わらわは人ではない」

振り返った。

「ろぼっとじゃ。あやつをだますだけの、ろぼっとなのじゃ」

言葉を、小夜子は何のたとえだろう、とただ聞いていた。いや、それとも本気で言っているのか。思うほど姫の目は笑っておらず、そしてとても澄んでいた。

そんな二人の真後ろで、カサリ、落ち葉の踏まれた音はする。近すぎて、小夜子と姫は驚くままに振り返っていた。

「遅くなって、ごめんね。お巡りさんがうるさくて」

そこに男の人は立っている。あちこちにガーゼを張りつけた顔が、やっぱり微笑み姫を見ている。とたん姫の表情にも体にも、ぐっと力が入る。

「なぜ、来た」

それはヒヤリ、とするような声だった。

「だって姫は、ぼくの一番だから」

繰り返すその人には屈託がない。

「そのようなわけがなからう。それはうぬが無知だけじゃ」

叱りつける姫が拳を握りしめている。

「そんなことないよ」

「わらわの秘密も知らぬくせをしおって」

「それはもう知っているよ」

譲らない彼もまた、笑みを絶やしはしなかった。

「違う。うぬの思い浮かべておるような、そのようなつまらぬ秘密などではないわっ！  
もっと大事な。明かさねばならぬことが、わらわにはあるのじゃ」

前で姫は激しくおさげを振り、それでも男の人は穏やかに微笑み続けていた。

「大丈夫だよ、言っごらんさ」

ただ促す。

「こっ、後悔しても、知らぬぞよっ」

言う姫の唇は震えていた。

「本当は、わらわは……！」

『彼をだますために送られた詐欺集団のアンドロイドだった。明かしたところで彼はやはり勘付いており、だからしてあの時「逃げる」と促したのも、いざれ駆けつける警察から彼女を守るためだった。ずいぶん前から悪事から抜けさせるため、姫へ求婚もし続けている。そしてそれが非力な彼の、唯一の方法だったことも明かした。』

そうまで信じ、彼が大事にしたかったのは、雨の降りしきる電話ボックスの中、不安そうな顔をした、まだ誰にも嘘をついていない姫だけだ。助けてあげたい。そう心に決めたのも、その日からで間違いなかった。

二人はやがて歩き出す。

行き先はまだ分からない。

雨がまた二人を包み込もうとしていた』

ふう、と小夜子は息をつく。

そうして握り続けたペンを置いた。

最後まで聞いてしまうなんて、あの頃の自分にさえずうずうしくて、だから男性が現れ

てすぐ、小夜子は公園を後にしている。ゆえに本当は彼女らが何者で、彼とどうなったのかなど知る由もなかった。

ただあの日、見舞いの帰りに電話ボックスはどこかと、そこで人と待ち合わせしているのだけだと、女性たちに話しかけられたことだけは事実で、教えて男性が現れたそのあと、なんだか釈然としない思いがこうして巡らせる想像の種となっていた。

詐欺集団だとか、彼女が本物のアンドロイドだったとか、細かいところはちょっと盛り過ぎではあるけれど、それこそ作家の特権というやつだ。そのためにも駆使するものが妄想なら、衰えぬまま小夜子は三十を越えた今、幾つかのスランプを乗り越え商業作家として活躍を続けていた。

そんな最新作のしめくりは半年続いた連載に相応しい、小夜子の願うあの日の結末で間違いない。

「おい、さよー。芋、焼けたぞー」

と、机の向こう、ガラス窓を震わせ夫の声は吹き上がってくる。

「わー、うれしい。ちょうど書き終わったところなの。今、行くっ!」

開けた窓から小夜子は返した。

「三つあるから、お母さんも呼んでこいよー」

もちろん。

閉めた窓へ背を向け返す。

そうして「あ」と小さく声を上げていた。

この年になってもまだ時々、見るのだ。そこに小説の神様は尻尾をなびかせ飛んでいた。一瞬だったので見間違いかもしれないが、その尻尾には今も確かと父親は乗っている。

飛べ飛べ、飛び続けろ。

小夜子は念じた。

その胸に、あの声は今も響き続ける。

よく来たね、勇者君。

さあ、ペンをとりたまえ！

お題連作集 二〇一六

「詐欺師と少女と、小説と」

完



## おまけ

最後までお読みいただきありがとうございました。

お題連作短編にトライするのは、これが二度目となります。今回は各話、もう少し断絶してしました。ここまでつなげることが出来たのは、以前より視点の操作がうまくできたからではないか、と振り返っています。

たとえ行き当たりばったりのように見えても、それが読解するに困難極まる前衛作品でない限り、どの物語も全て定形を周到した親戚筋、血のつながった兄弟みtainなものであるというのが、物語の限界なのではないか、そんな風を感じています。

つまり作品にある個体差は、既存の定形にどんなアイテムを詰め込むかで生まれるもので、その組み合わせが差異であるなら、逆に何を詰め込んでも物語そのものを成り立たせることはできるはずではないかというところから、この試みを行いました。

結論は読者の皆様に判断いただくとして、完結できた今、私自身はその事実を体感できたかな、と感じています。

ということとで実験の締めくくりとして、過程（手順）を残します。合わせてご一読いただければ、執筆の臨場感もまた味わっていただけるのではないかと感じています。

### 第一話【繋ぐ 橋 夜空】

冒頭、あまり具体的に決めてしまうと後が固定されてしまうので、選択肢をなるべく多く残しておくためにも避けたく思う。だからして主人公も対峙する読者の立ち位置も明示しない。視点もぼかす。お題自体「夜空に橋をかけて繋がる」という幻想的イメージが強いので、そこにだけ乗ることにする。

### 第二話【温泉 十五夜 対価】

さすがに二話目も登場人物不在はキツイ。が、なるべく誰視点の物語かは、まだ出したくない。「温泉」「十五夜」はセットで扱えそうだが「対価」はどうするよ。とりあえず親子で出して主人公がどちらなのかはぼやかす。死んだ父親を出すことで、イザとなれば「死人の語り」への逃げ道も残しておく。

### 第三話【老人 ファッション 寝坊】

うおいつ。老人出てきた。先に出した二人は役に立たないぢやねか。「老人」が「寝坊」でまともに無難にかたしておいて、問題は前回とのつながりなら、親子のじっちゃんに据えておくか。で最後、ちらっと前回の女の子をかませて処理。

#### 第四話【招き猫 くるみ 黄金】

ひく、人間にかかわるものじゃないじゃん。四人出したのに。(うち、一名死亡)「黄金」の「招き猫」は実在するからそれを使う。「くるみ」はどうする。あの四人とどう絡める。直接つなげないので、また登場人物を増やしたうえで「くるみ」を扱える設定をねじ込む。でもって困った時の「夢オチ」炸裂だ。しかし一度しか使えない必殺技だから、たいてい最後にかますわけなのだけど、早くもここでカードを切っているのかオイラ。自分の首を絞めてないか。悩む。でも、やっちゃおう。

#### 第五話【レモン 里親 喫茶店】

ぐはっ。病院という場面を出してすぐさま「喫茶店」かよっ。まだ宇宙船とかじゃないから同じ大気圏内、マシと思おう。ということとで前回とつながりを持たせるなら、二人のうちどちらかを利用するほかなく、どうやら前回「幸せ」について考えることになってしまっ

ていたので、ここでもその流れのままに「幸せ」について書くことにする。「夢オチ」は大  
事な便利アイテム。一話限りの使い捨てにはしない、という前回との関連性で。

#### 第六話【コロンブスの卵 人形 実行犯】

よかった。このまま「幸せ」について、なんて流れが固定してしまっただえらいことにな  
る。それはそれ専用で書け。「実行犯」を利用して場面転換しよう。思わず「コロンブスの  
卵」の意味をググる。どこに犯人がいるのか、どのような犯罪が行われているのか。考える  
と同時に、勢いで出してきた登場人物の整理もス。というか現地地点、誰が実在していて誰が  
動けて、誰と誰が今、同じ場所にいるのか分からなくなりつつあるという。最後の一行で、  
次のハナシの方向だけを示して終わる。これなら絶対何が来てもつなげられる自信はある。

#### 第七話【パラシュート 真実 カラオケ】

犯罪者はあっさり逮捕させておかないと、サスペンス、クライムものは理屈勝負だからこ  
こには向かない。場面転換させてくれてありがとう、で犯罪者へは合掌。見送ったそのあ  
と始末をする。「真実」だけがモノではなく概念なので、やっぱり厄介。「パラシュート」「カ  
ラオケ」の二大レジャーをくっつけ押し付けてみると、無理難題が浮かび「かぐや姫」を連

想したので、それで行くことにス。ここで出てきた二人は妙に気に入ったので、どこで炸裂するか分からないけど踏んでくれることを願って「○の慕情」「加山○三」を地雷と埋め込んでおく。

#### 第八話【サーカス リクエスト ハロウィン】

犯罪者が登場してから病院を離れ、どこか知らない土地へ舞台は移ってしまった訳だが、前半の親子らとこのまま泣き別れてしまうとオハナシに一貫性がなくなるので、軌道修正必要。話数的にもポチポチそっちと絡めて行かないと「クルミ症候群」だって設定したのに浮いたままで不自然だし。で「おじょうちゃんたち」を動かすことにするが、もう絶対「おじょうちゃんたち」は具体的に書いてやらない。一話以降、積もりに積もって情報量も増えてきてるので、今後の展開の足を引っ張らぬよう、削げるところは徹底的に削いで自由を保っておく。

#### 第九話【初恋 灯台 雨】

というところで犯罪パートと、親子パートを接合させる、それがこの回の目的。このお題三つは一つの絵の中に納まるので、女の子の年齢を登場当初から一気に引き上げることで処

理。犯罪者と親子が出会ったことでミッション完了。ラクでよかった。あ、でも次はまだ考えていない。無駄だし。笑。

#### 第十話【休日 ライター 本屋】

正直、おじょうちゃんたちがボスを探して警察へ突撃、はダメでしょ。彼女らは「指示（コマンド）」が欲しいだけで、物理肉体はどっちでもいいからそこまでしそうな気がしない。ということとは彼女らを動かすことは、出来ない。ので、またまた登場人物追加を要ス。短いのに次々人が出てくるなあ。毛色の違う奴を出してかぶらないよう……、で悪を食うさならなる悪、閃いた。この二人は先の二人よりも「本気」らしいことで書き分けする。

#### 第十一話【色 着物 パラダイス】

この辺りから、結末までの流れが出来る。ただしお題の影響でどう歪むかは分からない。嘘つきには嘘つきを。博士を書いていて途中から頭の中に、俳優の吉田鋼太郎さんがちらつく。いや、そうちしまえ！ で「パーラ、ダーイス」でお題を処理。やりそうだ……。うん、書いていて楽しい。そして地雷、踏みました。ここで炸裂ス。

## 第十二話【勤労 夫婦 約束の場所】

吉田鋼太郎さんをイメージしてしまったので、頭の中を劇画が流れる。マジメに書いてもすでにトンデル設定なので、ここは西部劇をぶっこもうと、吉田からドラマ「ドクターX」を引っ張り出す。だからうん、楽しいなあ。「約束の場所」は、この展開にはあまりにナイスなワードで助かった。乱闘描写は好きだけど、文字数からして端折るに決定。さあ、ラストへ向けてガンバロウ。

## 第十三話【カメラ 隣 妄想】

そう！ やっぱり主人公は冒頭に登場した誰かでないかね。そんな冒頭にどうミラクル着地させるかで、まとまり具合は試される。そのためにも、あれだけ間口広くぼやかして出だしを書いたわけだし。ここでも「妄想」だけが概念ワード。しかしこれが、忘れていたことを思い出させてくれた。不思議なもんだね。どうしてつながるんだろうね。

## 第十四話【音 カフェ 後悔】

全てを回収して、閉じる。そして始まりへ還る。このとき物語は物語として、ひと塊、になる。このテンプレは強いなあ。わたしが考えたのではなくおそらく、テンプレとお題の

化学反応が、ここまで運んでくれた。なので自分で素材（お題）をそろえて書いてゆく時と違い、思いにもよらない場面が飛び出してきて面白い。どうせその組み合わせ違いの亜種量産が能力の限界なら、組み合わせ方のマンネリ脱却にはちょうどよい。ということ、ダブル夢オチみたいになっただけ、こんな具合に仕上がりました。マル。